



スローガン
「幸せ
あふれる
北小」
～私も幸せみんなも幸せ～

はぴねす

地域の安全のバトンを次へ！交通少年団卒団式

先日、時津北小学校交通少年団の卒団式が行われました。今年度の卒団生10名は、学校の代表、そして地域の安全を守るリーダーとして、1年間立派に活動してくれました。交通安全週間の立哨（りっしょう）活動では、各交差点に立ち、元気な挨拶とともに下級生の安全を見守る姿が印象的でした。また、自転車大会県大会に向けては、夏の猛暑の中、放課後や夏休みに日々練習に励みました。本番で見せてくれた、きびきびとした言動や確かな技能、そして準優勝という功績は、多くの人の心に残っています。

卒団式では、一人ひとりがこれまでの活動を振り返り、交通安全への決意を新たにしました。6年生のみならず、学校の安全のために尽力してくれて本当にありがとうございました。中学校へ行ってからも、ここで学んだルールと思いやりの心を忘れず、新しい生活を楽しんでほしいと思います。



次へ繋ぐ最後の代表委員会

本年度最後となる「第5回代表委員会」が開かれました。議題は「今年度の北小チャレンジを振り返ろう」です。今年のスローガン「しっかり考える北小チャレンジ」のもと、各委員会やクラスで取り組んできた成果と課題を出し合いました。「自分たちの学校を、自分たちの手でもっと良くしたい」という熱い思いを胸に、3年生から6年生の代表者が集結。活発な議論が行われました。今回見つかった課題は、次年度へと確実に引き継がれ、より良い北小へとつながっていくはずですよ。

北小を笑顔に！「北小幸せプロジェクト」

4年生の総合的な学習の時間では、自分たちの手で北小をより過ごしやすい、もっと幸せな場所にしようと、「北小幸せプロジェクト」に取り組んでいます。活動内容は多種多様です。
・体育倉庫をきれいにする
・ピカピカプロジェクト
・足元から心を整える
・トイレのスリッパ並べプロジェクト
・校内の緑を大切に
・豊かな自然プロジェクト
・愛着を深める

「北小マスケットキャラ作りプロジェクト」までもなく高学年への一歩を踏み出す4年生にとって、自分たちで計画を立て、運営・企画を経験するこの活動は、3月の委員会決めに控え、今、絶好の成長の機会となっています。

《活気あふれる活動の様子》

ある日の朝、児童玄関前では「みんなとあいさつプロジェクト」のメンバーが元気な声を響かせていました。

昼休みにはさらに賑やかに！グラウンドでは「イベントプロジェクト」による4年生対象の「逃走中」、体育館では「お楽しみプロジェクト」が1年生を招待して「王様ドッジボール」を開催しました。企画した子たちの誇らしげな表情はもちろん、参加した下級生たちの弾けるような笑顔がとても印象的でした。

自分たちでアイデアを出し合い、協力して形にする姿は、高学年に向かう自覚に満ち溢れ、輝いて見えました。次はどんなワクワクを届けられるのか、4年生のさらなる活躍が楽しみです！



ついでに

若い頃からコーヒーが好きだ。今でも毎食後や甘い物を食べる時には欠かせない。少々贅沢かもしれないが、豆から淹れるレギュラーコーヒーにこだわっている。自宅で余裕がある時は豆を挽くが、普段は手軽な一杯だでのドリップだ。ドリップコーヒーは、お湯を注いだ瞬間の「最初の一滴」が最も香り高く、おいしいと言われる。私もあの立ち上る香りが大好きだ。しかし、日本茶の場合はその逆だという。急須から注がれる最後の一滴にこそ旨味が凝縮されており、それは「ゴールドドリップ（黄金の一滴）」と呼ばれている。

これらを学校教育に例えるなら、コーヒーの「最初の一滴」は4月、日本茶の「黄金の一滴」は3月だ。

4月、新しい学年や仲間と出会い、新鮮な気持ちでスタートする瞬間の緊張感と高揚感。それは、その時期にしか味わえない特別な「香り」である。そして3月。今、私たちはまさに「黄金の一滴」の時間を過ごしている。この1年間、各学級で積み重ねてきた活動の総まとめの時期だ。クラスの人や担任、そして異学年の仲間や先生方と築いてきた絆が、今、最も深く、濃く、味わい深いものとなっている。

5日（木）には「6年生ありがとう会」が行われる。下級生が6年生へ贈る感謝や憧れの言葉も、この「黄金の一滴」の時期だからこそ、真実味を帯びて心に響く。6年生からのメッセージが胸を打つのも、これまでの歩みと、互いを思いやる関係が熟成されているからだ。今年度も残りわずか。子供たちにとって、最後の一瞬まで旨味が凝縮された、コクのある日々となることを願っている。

「叱らない」が子どもを苦しめる(?)

今回のタイトルは逆説的な印象を受けるかもしれませんが、ある本の題名で、藪下遊氏（スクールカウンセラー）と高坂康雅氏（大学教授）によるものです。増加している不登校児童生徒数について両者が詳しく分析、支援方法を提案しています。



本の中では、不登校に関する現状を「世界からの押し返し」を受ける経験の不足によるものと述べています。「世界からの押し返し」とは、子どもが成長していくうちに多く見られる危険を伴うもの、他人の迷惑となる行為、社会上望ましくない行為に対して、その時に周りの大人が行う「叱る」「止める」「諫める」ことです。これらができるのは、一番は保護者でしょうが、学校の教員や地域の大人達もできることです。また「世界からの押し返し」とセットで大切なのが、押し返しを受けた時に子どもが出してくる不穏感情（泣く、ふてくされる、癇癪を起こすなど）と大人が向き合うことと述べられています。この「世界からの押し返し」を受け、不穏感情を受け入れてもらう経験が少ないと、ネガティブな自分を認められず、学習への意欲、成長の意欲につながる「未熟である不全感」（できないことがあると認めること）にたえられず、「目をそらし」たり「回避（身体的反応も含む）」したり、根拠なく自分は何でもできるという「万能化」したりすると書かれています。このような状態では、学校は、「耳にしたくない情報を与えられるところ」であり、教師は「不快な情報を送ってくる人間」へとなり得るとのことです。



ここまで書くと、「世界からの押し返し」の第一人者である保護者のみにスポットが当たりがちですが、社会全体にも「世界からの押し返し」を避けている現状があると述べています。よく言われる「ほめて伸ばす」ことですが、この考えが変質し、「問題を指摘しない」「ネガティブさを示さない」ことになっているのでは、とのこと。学校でも私が小学生のころもらった通知表には「落ち着きがない。」「話を聞いていない。」等あからさまな表現が入っていましたが、今はほとんど見られませんが、近所の口うるさいおじさんおばさんも最近ほとんど見かけません。本書の中には、テストなどで✓を付けられるのを嫌がるのでやめてほしいと要求する事例も紹介されています。

私たち大人が目指すべきは「子どもたちの自立」です。子どもたちに「世界からの押し返し」を「成長のための不快」として捉えられるよう、押し返しながらもその子の不穏感情をしっかりと受け止め、向き合うことが大切だと考えます。社会で通用しないこと、自分・他人が不利益をこうむることはしっかりと「だめだよ。」と教えることが大切だと考えます。子どもが泣く、ふてくされる、癇癪を起こすことに向き合い続けるのは大変ですが、根気強く、何度も、でも結果は急がず教えていく必要があると強く感じます。そしてこのことを、今一度家庭と学校で共通理解していく必要があると思います。



次号ではこの本で紹介されている望まれる関わり方について具体的に紹介していきます。